



東お多福山草原の保全活動に集う仲間たち (2012年11月)

『保全協会は、第2回草地生態系保全シンポジウムを大阪市立総合生涯学習センター（大阪市北区）で開催しました。悪天候にもかかわらず100名を超す参加者があり草地への関心の高さを示しました。今後は大阪各地の草地保全グループとネットワークを形成して活動を進めていくことが重要になっています。』

記念講演

生物多様性を育む草原の再生をめざして
～六甲山地東お多福山の取り組み事例～

文・写真 橋本佳延 (兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員)

1.日本から半自然草原が消えていく

半自然草原は、かつては茅をめぐって流血の争いが起こるほどの価値をもっていました。戦後のエネルギー革命でその状況は大きく変化しました。耕耘機などの農業機械の普及は農耕での家畜の利用の停止を招き、草原から飼料を採集する必要がなくなりました。屋根葺き材料の変化は茅の利用量の激減につながり、茅場管理の必要性を失わせました。化学肥料の使用が主流となると、青草を畑にすき込む“刈敷”農法は衰退しました。草原の利用が少なくなると、森林遷移が進行、草原面積の縮小や優占種・種組成の変化が起こり、かつてのような生物多様性の豊かな大規模な半自然草原が次々と姿を消していききました。

2.東お多福山草原とは？

私たちが現在保全している草原は、兵庫県南東部の六甲山地に位置する東お多福山の山頂部に、神戸市と芦屋市の市域にまたがる形で広がっています(図-1)。全国傾向と同様、兵庫県、神戸市のいずれでも草原は減少、希少な生態系となっており、兵庫県での草原面積は県土のわずか1.17%に過ぎません。そのため、東お多福山草原は兵庫県レッドデータブック(2010) (植物群落) および神戸市版レッドデータブック(2010) (植物群落) においてBランクに指定されています。

また、本草原は瀬戸内海国立公園六甲地区に位置し、瀬戸内海を一望できる良好な眺望とススキ草原が広がる植生景観により芦屋市域は特別保護地区、神戸市域は特別地域に指定されています。



図-1 東お多福山草原までのアクセス



写真-1 東お多福山にススキ草原が広がる様子 (1976年撮影 故 矢野悟道博士撮影)



写真-2 密生したネザサの下には光が届かず他の植物の大半は生育できない

3.東お多福山草原の変遷

本草原は昭和初期までは茅場として利用されており、ススキが優占し、その下層に背丈の低いネザサが生育するススキ-ネザサ群集に分類される植生が成立していました。草原面積は1948年当時で少なくとも82.9haはあり、現在の芦屋カンツリー倶楽部が位置する場所まで本草原が広がっていました。

戦後から1970年代にかけては、本草原でも茅の利用が停止、森林への遷移が進行して面積縮小(1979年で33.1ha) やススキからネザサへの優占種の変化が起こりました。しかし、頻発する山火事によって草原が度々焼かれたために、意図せずススキ優占型の植生が多く維持されてきたようです。また1969年に起こったネザサの一斉開花現象により草原の大部分でネザサが枯死したため、再びススキの優占する草原へと移りました(写真-1)。

1972年からは神戸市域で背山事業の一環として東お多福山草原の一部でヒノキの植林が行われました。植林管理の一貫として植林地を含めた草原全体の刈り取りが実施されたため、1990年頃までは東お多福山草原の大部分はススキが優占する草原として保たれていました。しかし、その後は次第に刈り取

り面積は縮小、その頻度も少なくなり、2007年には草原面積は9.2ha(1948年の約1/9)まで縮小してしまいました。この頃になると優占種もほとんどの箇所がネザサとなり、ススキは点在する程度しかなく、草原生植物もハイキング道脇や踏み付けられる一部の場所で見られなくなっていました。特に人の背丈に近い高さに生長したネザサ群落の下は非常に暗い環境となっており、草原生植物はほとんど生育していませんでした(写真-2)。

4.保全活動のきっかけ

このように戦後60年間で生物多様性の乏しいネザサの優占する狭い草原へと変化してしまった東お多福山でしたが、ハイキング道沿いなどのわずかな場所に明るい環境が残され、ツリガネニンジン、オカトラノオ、ノアザミ、オトギリソウ、オミナエシ、シラヤマギク、スズサイコ、オケラ、キキョウ、ワレモコウなどの草原生植物がかろうじて生育していました。ススキもネザサ群落内で小さな株ではあるものの点在していました。

「森林となってしまった場所を皆伐し、かつての大面積の草原を取りもどすことは無理でも、ススキが優占し草原生植物の豊かな草原環境に還元す

ることは可能かもしれない…」兵庫県神戸県民局主催の六甲山系里山研究会(2006年度)で兵庫県立大学の服部保教授(当時)が訴えた東お多福山の重要性の話に刺激され、このような希望を持った複数の市民団体が、2007年秋から協働で東お多福山草原の保全活動をはじめました。

5.東お多福山草原
保全・再生研究会とは？

東お多福山草原保全・再生研究会は、ブナを植える会会長の桑田結さんの呼びかけで集った5つの市民団体が、2007年秋からはじめた活動から発展した団体です。正式な会の発足は2011年1月ですが、2014年現在で活動7年目に入ります。構成団体は里山団体や山岳会、研究者や茅葺き職人などユニークで、現在は図-2に示す9つの団体から構成されています。

行政との連携を密にして活動を進めていることも本会の特徴の一つです。国立公園の特別地域・特別保護区内での活動となることから、環境省神戸自然保護官事務所からは活動の許可を得ているほか、アクティブレジャーには現地活動に参加いただいています。兵庫県からは、本会の活動を「ひょうごの生